

32 貝原益軒の最後の著書『慎思録』に

ついて

原 敬二郎

『慎思録』は、『養生訓』を出版した年益軒は八十四歳であつたがその後翌年の益軒没年に出版された最後の著書とされる本であり、内容は益軒の一生を振り返つての反省と社会の一員としての人間の道徳、倫理を示したもので、日本医師会倫理委員会の提唱する医道五省と等しく医師の日常の座右銘としてふさわしいものである。

例えば『慎思録』第一章には、
人生まれて学ばざれば生まれざると同じ。学びて道を知らざれば学ばざると同じ。知つて行う能わざれば知らざると同じ。故に人たる者は必ず学ばざるべからず。学をなす者は必ず道を知らざるべからず。

第二章には、

道を知るものは必ず行わざるべからず。道を知るは至

つて難し。古より英才敦厚の士多からずとなさず。然れども道を知る者はすくなし。学問思弁の功欠く可からざる所以なり。

第三章は、

学をなす者は只、明らかに善悪をわきまえて善に進み悪をやめんことを求むるのみ。もしかくの如からずんば則ち以て学となすに足らず。故に先ずその基本を立てて又その禁戒を守るべし。基本を立てて後并かに進むべし。禁戒行われて後、悪に遠ざかるべし。

とある。尚『慎思録』には興味あるものとして、

情欲の萌すはその初め甚だ微なり。故にこれを制するや易し。従来陥溺の久しきその不可なるを知ると雖もしかもこれに克つこと能わず。故にこれを小に制せざれば則ちその大をいかんともし難し。

とある章は、情欲のコントロールがむずかしくなつてきている現代のインテリに対する警鐘であろう。次の章に
普むる者は或はその実に過ぐ。破る者は或はその真を損ず。これ衆人の毀誉する所の常情なり。いわんや小人奴隸の毀誉は或は私昵旧恩あるにより或は私怨宿対ある

による。

この章を読んで考えられることは医事紛争が多発している現況を考えてみると益軒の云うように従業員対策の及んでいない或は不公平な経営者の姿勢により内部告発をなされているケースが多いという事実がある。これは医師と患者さんとの関係によっても同じことでインフォームドコンセントの不足や不充分によつてこの両者の関係がぎくしゃくしたことになるものが多いことは現代にも通じる警告であろうと思われる。

又開業医に必要な人事（従業員対策）については、人各々能あり不能あり。長とする所あり短とする所あり。明者の人を用うるや。その能を用いてその不能をつつしむ。その長とする所を取つてその短とする所をゆるす。尚良医の薬を用い、良匠の材を用いるごとし。

要するに適材適所と云うことで、各人の長所を大いに賞めてやり、短所は寛大に接してやるのが大事で、あたかも名医が適薬を用いて人命を救い、適材を適所に用いると同じであり、従業員も長所をうまく活用してやれば各人の才能を十分に延ばすことができる。

当今医師の倫理性の低下が各方面で叫ばれている。古代にも犬医者と言はれ徳川將軍綱吉に追従のあまりお抱え大専門医に転向し一般の響感を買つた医師も存在したが、大半の医師は貝原益軒やこれも福岡の名医亀井南冥、香月牛山にみられるごとく医師としてと同時に儒者として、中国や日本の倫理道德（儒学）を充分勉強し、社会道德の模範者としての教養を併せもつた医師であつたものである。このように倫理觀の確立した医師は道德を踏み外して、世間の指弾をうけることもなく、市民から尊敬されて一生を過ごしたものである。日本医師会の提唱する医道五省はまさに貝原益軒の唱える『慎思録』の内容を要約したものと云える。現在の日本の医師にとつて必要であり、緊急課題であるのはこのような倫理觀の確立ではないかと痛切に思われるのである。

（恵光会 原病院）